

「やっぱり本が好き！」 松原六中 図書委員会の歩み

松原市立松原第六中学校 辻本 尚子

1 はじめに

松原市立松原第六中学校は、松原市の一番南に位置し、393名の生徒が在籍している。現在は落ち着いているが、10年ほど前は、いわゆる「荒れ」に近い状態にあった。そんな中、当時の教員たちが取り入れたのが「朝読書」の取り組み。初めは本に集中できない生徒もいたが、少しずつ本を読むことにも慣れ、現在では学校全体が読書をすることで静かに1時間目を迎えられている。

松原市の小中学校の図書室には学校司書の方がいない。今年度から1名の司書の方が来られるが、まだ小学校が中心。図書室の運営は、図書担当の教員や図書委員会の生徒たちの力で行われている。

<松原市立松原第六中学校 図書委員会の主な活動>

- ・月曜日と水曜日の昼休みに図書室を開館（約10年前まで）
- ・図書委員の当番制で貸出や返却作業も行う（学年別ファイルに書き込む）
- ・「図書ニュース」の発行 ・おすすめ本の紹介 ・ポスター作り
- ・新刊本の購入リクエスト ・本の整理
- ・図書委員会での審議（毎月）
- ・「図書室のしおり」作成、配布（新入生向け）

六中では松原市でもいち早く、図書室の蔵書管理の電子化を図る。2010年（平成22年）頃から。

図書室の本棚の奥から順番に、1冊1冊に新しくナンバリングしたバーコードを貼り付け、その本のICBMと合わせて新規登録をするという作業。教職員、保護者のボランティア、図書委員など、みんなで協力して作業にあたる。

2011年（平成23年）4月から、バーコード処理での貸出開始。従来のファイル形式も併用しながら、図書委員たちで貸出、返却作業を行う。

2 思わぬ2つの出来事

2012年（平成24年）4月、松原市内の中学校で給食が開始される。昼休みの時間のなさや、付き添い教員の難しさから、放課後への開館にやむなく変更する。これにより来室者数にも大きな変化がでる。

協力して仕上げた電子化システムが、突然壊れる！という事態が起こる。その後、機械そのものを入れ替えることになり、その結果、本の再登録をし直すことになる。貸出作業はまた手作業へと逆戻り。この時、図書ボランティアの保護者の方たちが膨大な数の登録作業を進んで手伝ってくださる。そのおかげで、短期間で登録作業も終わることができた。

3 改革 ～みんなが楽しめる図書室へ～

<図書委員会の新しい取り組み>（放課後への開館変更に伴って）

- ・「スタンプカード」の発行（特典・・・本にはさむ「手作りのしおり」）
- ・机の配置変え・新しい本棚や陳列台の設置
- ・手作りのポップをつける
- ・白のレースのカーテンをつける
- ・朝読書の時に読む本の貸出作業の手伝い（各学年で）

- ・放課後の開館日についてのお知らせの徹底（火曜日、木曜日の週2回）
給食の時間に行っている生徒会の放送で、開館・閉館について知らせる。
図書室と、放送室の前にも図書室の開館・閉館を表すボードをかける。
- ・「しおりコンテスト」の実施（「スタンプカード」の特典として、2016年）
募集した作品をプリントにして紹介し、終学活の時間に、全校生徒で投票する。
評判のよかったデザインを考えた生徒たちを全校集会で表彰。

＊第2回「しおりコンテスト」（2017年）

約20点近くのデザインの応募がある。アニメ風なものから劇画タッチなものまで、クオリティーの高い作品がたくさん集まる。

4 アンケート結果より

今年の前期図書委員会により、「みんなは図書室について、どんなことを考えているのか」を知るために、図書アンケートを実施する。

アンケート結果・別紙参照

このアンケート結果からも、放課後の時間帯の都合の悪さがはっきりする。その原因の一つは、クラブ活動。六中のクラブ加入率は、全体で83%にもなる。なかなかクラブに遅れていくのはよし、としない生徒が多いようだ。いろいろな取り組みや補習もあり、放課後の時間帯は難しいものがある。そして、「昼休みにも開館してほしい」との要望も多いことから、図書委員会と図書担当教員との話し合いの結果、2学期から試験的に月曜日の昼にも開館することになる。また、後期には「スタンプカード」の改善企画も考えられている。

5 新たな試みへ

実際に2学期からは「月曜日と水曜日の昼休み」にも図書室を開館している。（貸出作業は図書担当の教員による）

10月から後期図書委員会の活動が開始。「スタンプカードコンテスト」や図書室の本の整理などが予定されている。引き続き「図書室のアピール」に力を注ぐ方向。

6 「やっぱり本が好き！」

こうした図書委員たちの取り組みを見ていく中で、基本的に変わらないと思うことは、図書委員、一人一人が「本当に本が好きだ！」ということ。そして、図書委員になりたいという生徒が多くいること。

図書委員たちは、自分たちだけでなく、他のみんなにも本のすばらしさを伝えたいと心から思い、日々図書室に訪れてくれている。「そのためには、何をすればいいか」を真剣に考え、実践する。時には、失敗もしながら「あの本、面白かったね」と言ってもらえるのを待っている。そんな、一人一人の思いが、少しでも実を結んでほしいと、私たちはサポートするばかりだが、今までの先輩図書委員たちからの思いを受け継ぎ、さらに一歩、前進していってくれることを願ってやまない。